

ちよう
町
陽
光
こう

忌部山に高地性の集落

太陽のように輝く——という趣旨から付いた町名は、大和高田市大字だったこの地域が昭和三二年七月に橿原市へ編入される時、近隣三村共立（昭和二五年）菅原中学校初代校長・山田宗治さんの提唱で決まったようです。

古くから箸喰（はしばみ）と呼ばれた当地は、南北朝期の至徳三（一三八六）年に興福寺関係の領地「箸喰荘」として古文書に初登場し、室町時代に土地の豪族・越智氏の勢力下に入ったあと、江戸時代に「箸喰村」となって明治時代を迎え同二三年の町村合併で天満村大字となります。明治一五年ごろ戸数四三戸・人口二二一人（町村誌集）だった当地は、米・はだか麦・綿の実・染料アイ葉などを作る（農産物取調表）のどかな農村でした。

隣の古川町との間にある忌部山（一〇八・五メートル）に高地性集落（弥生時代の逃げ城）のあったことが、昭和四五年の発掘調査で分かっています。この忌部山遺跡からは、全長一七メートル・深さ一メートルの溝や竪穴住居跡が発見されており、溝の中などから石矢じり・石のみ・砥石（といし）をはじめ土器の壺（つぼ）・甕（かめ）なども発掘されています。この地に古くから人の営みがあった証明です。